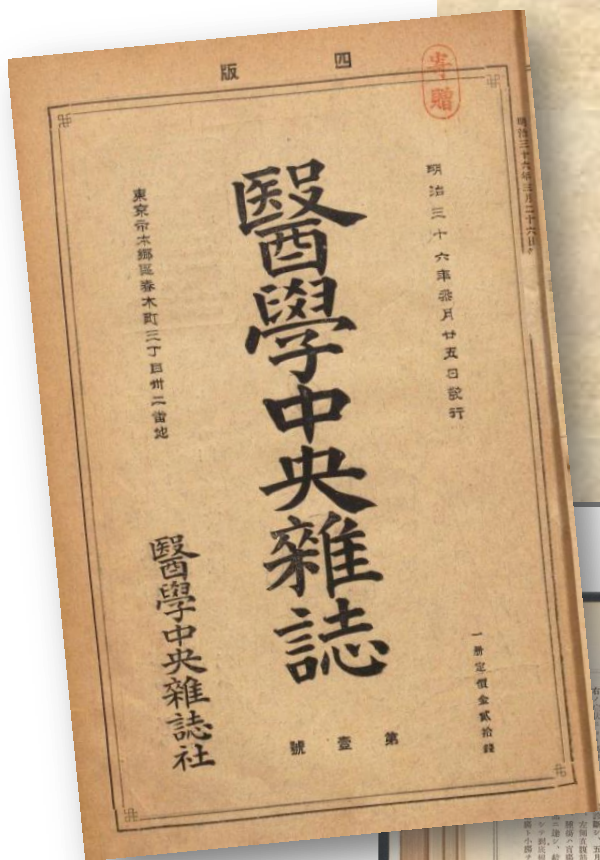


# 日本最古の医学情報データベースに携わった 養育院附属病院院長

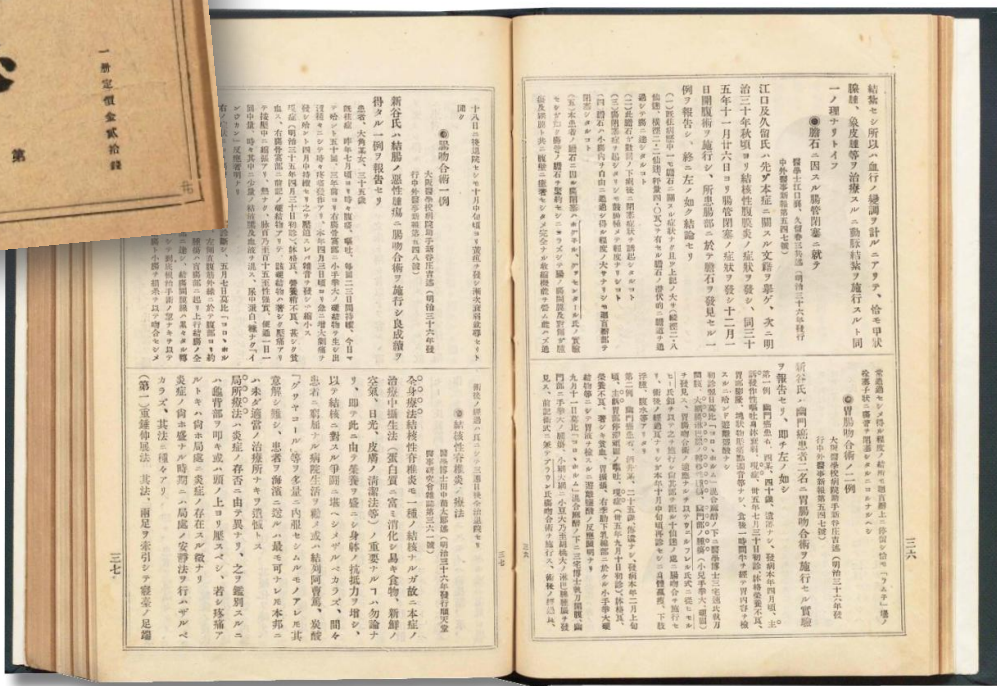
宮本孝一 (老年学情報センター)

コピー機・パソコン・インターネットのない時代に、文献(医学雑誌掲載の医学論文)の収集や引用の作業をどのようにやっていたのか、若い方には想像もできないのではないのでしょうか。洋雑誌には INDEX MEDICUS、和雑誌には**医学中央雑誌**という抄録誌があり、病院内図書館の一角を占拠していました。医師は、診療の合間や夜間、これをひもとき、筆写するのが、学会に発表するときのはじめの作業でした。

この「医学中央雑誌」を発行していたのが、尼子四郎・富士郎親子でした。尼子富士郎先生は、世田谷区の浴風会という老人施設を経営しており、老人病の泰斗でした。昭和47年、当医療センターの前身「養育院附属病院・老人総合研究所」が新築され大々的に出発した時の村上元孝院長、亀山正邦副院長、蔵本築部長、松下哲医長らや、現理事長の松下正明は、何れも尼子先生の所で、老人学を研鑽した方達でした。また当時の養育院附属病院の医師たちも医学中央雑誌の抄録づくりを手伝っています。(文責 稲松孝思)



## 医学中央雑誌 創刊号



尼子四郎



尼子富士郎

日本一古い雑誌データベース 日本一の医学関連専門誌(約三〇〇〇誌)の掲載記事・掲載論文(三六万件)を探す索引データベースに、**医学中央雑誌(医学WEB)**というデータベースがあります。

日本の医師・看護師など医療専門職が、専門分野や医療業務に関する最新の情報を入手するために、なくてはならないデータベースで、東京都健康長寿医療センターでも職員が日常的に使用しています。

かつては冊子でしたが、現在はインターネットを通じて、施設内のパソコンで使用します。医学中央雑誌は、約一〇年前、明治三六(一九〇三)年に一人の医師が発行し始めました。医学情報の索引誌としては世界で二番目に古く、日本で一番古い雑誌データベースです。

## 夏目漱石の家庭医が始めた「医学中央雑誌」

夏目漱石「吾輩は猫である」に登場する甘木先生という人物のモデルになった医師**尼子四郎**が、当時の医学先進国ドイツの医学雑誌索引誌に刺激を受け、千駄木にあった自宅を作業場にして「医学中央雑誌」の編集・刊行を開始しました。尼子四郎は近所に住んでいた夏目漱石の家庭医もしていました。

## 日本の高齢者医療の草分けと「医学中央雑誌」

医学中央雑誌刊行から二五年後、その刊行事業は尼子四郎の息子**尼子富士郎**に継承されました。尼子富士郎は、関東大震災で行き場を失った高齢者を収容した東京・高井戸の施設**浴風会**の医長を務める医師で、浴風会の医療は日本の高齢者医療の先駆けとなり「老年医学の発祥の地」と言われています。

## 尼子富士郎の作業

医学中央雑誌の編集とはつぎのような作業でした。

国内で発行された医学関連領域（医学、薬学、歯科学、獣医学など）の雑誌や図書を購入し、論文、学会発表のすべてを読んで採択、非採択を決める。採択が決まると、科目別分類をする。抄録が必要なもの、抄録を作る。これらを編集し、

校正し、索引語を指定する。富士郎は浴風会の院長としての仕事や、東京大学の老年医学の講義も行いながら、この「医中誌」発行の全ての工程を一人で確認し、とくに論文と学会発表の採否、科目別分類、最終校正においては全く一人でやっていったという。グラブリは印刷所から毎日数十ページ届くため、これらの校正に毎日数時間を要し、この日課は七八歳で亡くなる直前まで続けられた。（斎藤晴恵 尼子四郎と夏目漱石 医学図書館 五三巻一号より）

尼子富士郎の死後、富士郎の自宅でのこの作業を継承したのが、当時、養育院附属病院の院長に就いていた**村上元孝**でした。



養育院附属病院  
村上元孝院長

## 尼子富士郎の事業を継承した、新・養育院附属病院

終戦後しばらくは、昭和四七（一九七二）年、一般国民も対象にした高齢者医療専門病院として再スタートしました。新・附属病院の初代院長に就任したのが**村上元孝**です。

村上元孝は昭和三九（一九六四）年に医学中央雑誌刊行会の理事に就任し、医学中央雑誌の発行に関わっていました。またそれ以前に昭和三四（一九五九）年の日本老年医学会設立にも関わっていました。

村上元孝も尼子富士郎と同様に、日本の高齢者医療の開拓者でした。

村上元孝は昭和五九（一九八四）年まで院長を務めて「世界にも類を見ない、研究機能を持った老人専門病院」づくりをめざし、また、医学の世界では、日本老年学会や国際老年学会を会長として開催しました。

村上元孝は、養育院附属病院長在任中の昭和五〇（一九七五）年に医学中央雑誌理事長に就任、尼子富士郎の家内工業的といえる医学中央雑誌の発行作業を引き継ぎ、八年後には、コンピュータを使った編集をスタートさせました。

## 医学中央雑誌の電子化

「コンピュータ」編集を導入した村上元孝は平成元（一九八九）年に亡くなりましたが、その後も医学中央雑誌の電子化はさらに進展し、CD-ROM版発行を経て、平成二二（二〇〇〇）年にはインターネットで使用する「医中誌WEB」が始まりました。

明治三六年から始まった冊子は、平成一四（二〇〇二）年まで刊行されていました。

現在、日本中の医療機関・研究機関が医学情報の収集に使用している医学中央雑誌は、インターネット版「医中誌WEB」です。

